

精神障害に関する啓発プログラムの効果

—高校生を対象にした4年間の実践評価—

○ 日本福祉大学 大谷京子 (002998)

キーワード3つ：精神障害・啓発プログラム・量的調査

1. 研究目的

啓発プログラム参加者の、精神障害者に対するスティグマ態度と社会的距離の変化を明らかにすることで、プログラムの効果を検証し、改良のための課題を探求する。

2. 啓発実践の内容

本研究は、X 地域自立支援協議会による啓発プログラムを対象とする。X 協議会では、専門部会の1つである「精神障害者地域生活部会」に、精神障害当事者、家族、医療・福祉関係者、行政職員等からなる「啓発チーム」を結成し、2009年から啓発実践を展開してきた。

実践は、①地域の中で精神障害者が当たり前にくらしていることへの理解、②違いを超えて共生できる社会をつくる市民の養成、③疾病教育を目的としている。中学～大学までの学生、ホームヘルパー、病院職員等を対象にプログラムを実施しながら、チームメンバーでプログラム内容を改良してきた。プログラムの内容は、当事者、家族、関係者による体験の語りと、プログラム参加者を交えたシンポジウムを中心に、疾病教育や対話などを加除する形で構築してきた。10年近く実践を重ね、チーム内で、受講者からの自由記述アンケートや感想以外に、効果を把握する要求が高まった。そこで、尺度を用いた評価を開始した。

本報告は、Y 高校の2年生を対象に、2019年度から2022年度まで実施したプログラムの評価を対象とする。1学年全員が受講する福祉関連講座の2コマとして展開した。1回90分の内容は、1日目が、精神保健福祉士志望大学生からのプレゼンテーションと疾病教育、2日目が、当事者/家族/支援者からの語りと受講者を交えたシンポジウムである。シンポジウムのテーマは、「あなたは自分が好きですか」「コロナ禍を生きる」等を設定した。

3. 研究の視点および方法

質問紙は、望月ら(2008)の「スティグマ的反応」尺度と、山崎(2012)の「社会的距離」尺度を、高校生に回答しやすい項目に修正して作成した。「スティグマ的反応」尺度は、「精神障害者と一緒にいると緊張する」、「家族に精神障害者がいるのを知られるのは恥だ」といった12項目で構成した。また「社会的距離」尺度13項目は、「あなたのクラス担任になる」、「あなたの家の隣に引っ越してくる」といった状況を挙げ、どの程度意識するかを問うた。いずれも6件法で回答を求めた。

プログラム参加前と終了後に、Google フォームを用いてデータを回収した。分析は、IBM SPSS28.0.1.0を使用し、尺度の構造を確かめるための因子分析(最尤法・プロマックス回転)と、プログラム参加の前後比較のため、Wilcoxonの符号付順位検定を行った。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、事前に高校教員との協議を経て承諾を得、当日は研究内容、個人情報取り扱い方法等を記した説明文書を、プログラム参加者全員に配布したうえで、口頭でも説明し、調査協力への同意を得た参加者から回答を得た。日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認（19-23）を受けた。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。

5. 研究結果

調査協力者は、89人から139人、回収率は61.2～91.0%と、年度によってばらつきがあった。因子分析の結果、「スティグマ的反応」は、「精神障害者には話しかけづらい」といった項目からなる「関わりにくさ」因子と、「もし家族に精神障害者がいたら、それを友人に知られると困る」「精神障害者は自分の状態について恥ずかしいと感じるべきだ」といった項目からなる「恥意識」因子が抽出された。2022年度以外は、全ての項目と下位尺度得点の前後比較ではすべてが好転し、ほとんどが有意だった。「社会的距離」も、2022年度以外、有意に近くなっていた。

2022年度のみ、「関わりにくさ」「恥意識」「社会的距離」の全てが悪化し、「恥意識」については有意だった（表1参照）。

表1. Wilcoxonの符号付順位検定結果

	z値	r	効果量 (r)
関わりにくさ	.696	.487	.076
恥意識	-2.794	.005	-.305
社会的距離	.164	.870	.018

6. 考察

2021年度までの結果を踏まえると、本プログラムに一定の効果は認められる。先行研究でも、スティグマ低減のために最も有効なプログラムは、当事者との接触体験だとされており、語りとシンポジウムを通して経験や思考の交換をする本プログラムは有効だといえる。しかし2022年度は、生徒から「大人としておかしいと思った」「授業でふざけないでほしい」といった感想も聞かれた。つまり「大人」や「授業」といった定型イメージからの逸脱が、「恥ずかしいこと」として捉えられた可能性がある。

ありのままの当事者が、参加者の定型、すなわち許容範囲から逸脱していると捉えられると、精神障害者へのスティグマ態度を助長するリスクを負う。多様性への寛容度を醸成するには、参加者の持つ「定型」を少しずつ解体する必要がある。そのためには、先に共感や安心感といった土台が欠かせない。共感性を高める工夫、参加者側の「定型」を知る努力、その定型を解体しつつ再構築する戦略が、本プログラムの効果を維持するために求められると考える。

引用文献

望月美栄子・山崎喜比古・菊澤佐江子ほか（2008）「こころの病をもつ人々への地域住民のスティグマおよび社会的態度--全国サンプル調査から」『厚生学』55(15), 6-15.
山崎喜比古（2012）『心の病へのまなざしとスティグマ―全国意識調査―』明石書店。